

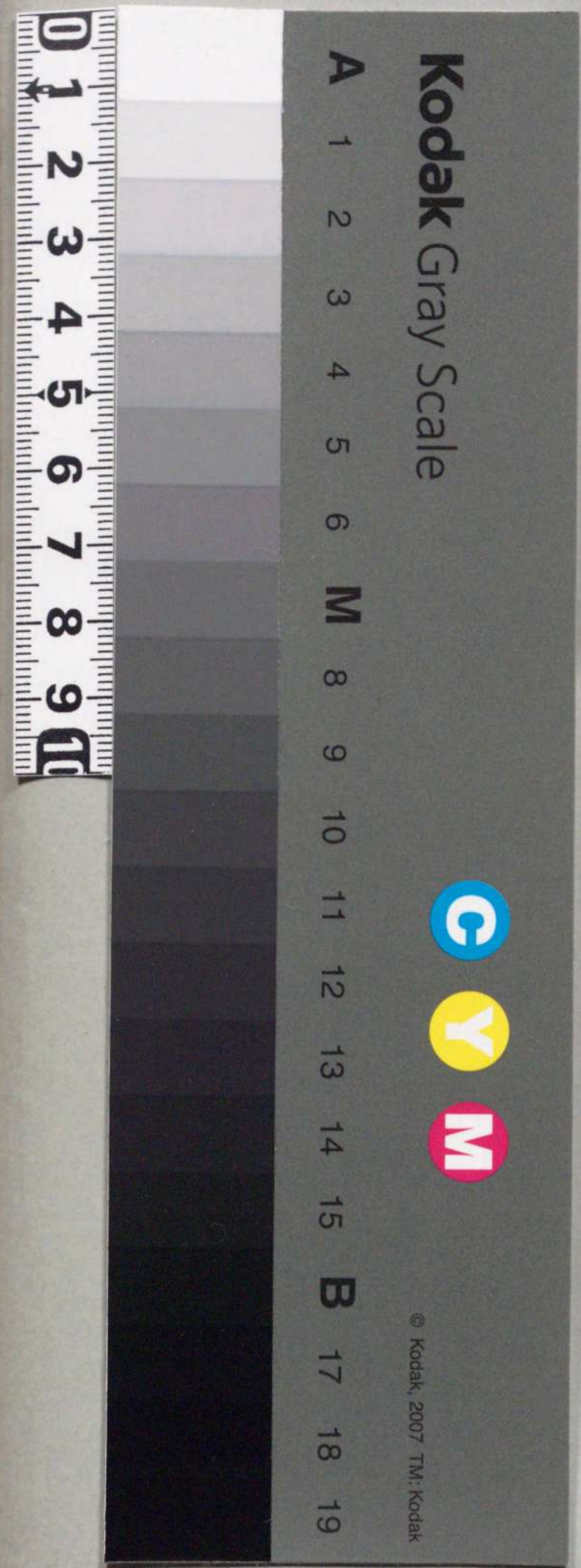
寛永諸家譜

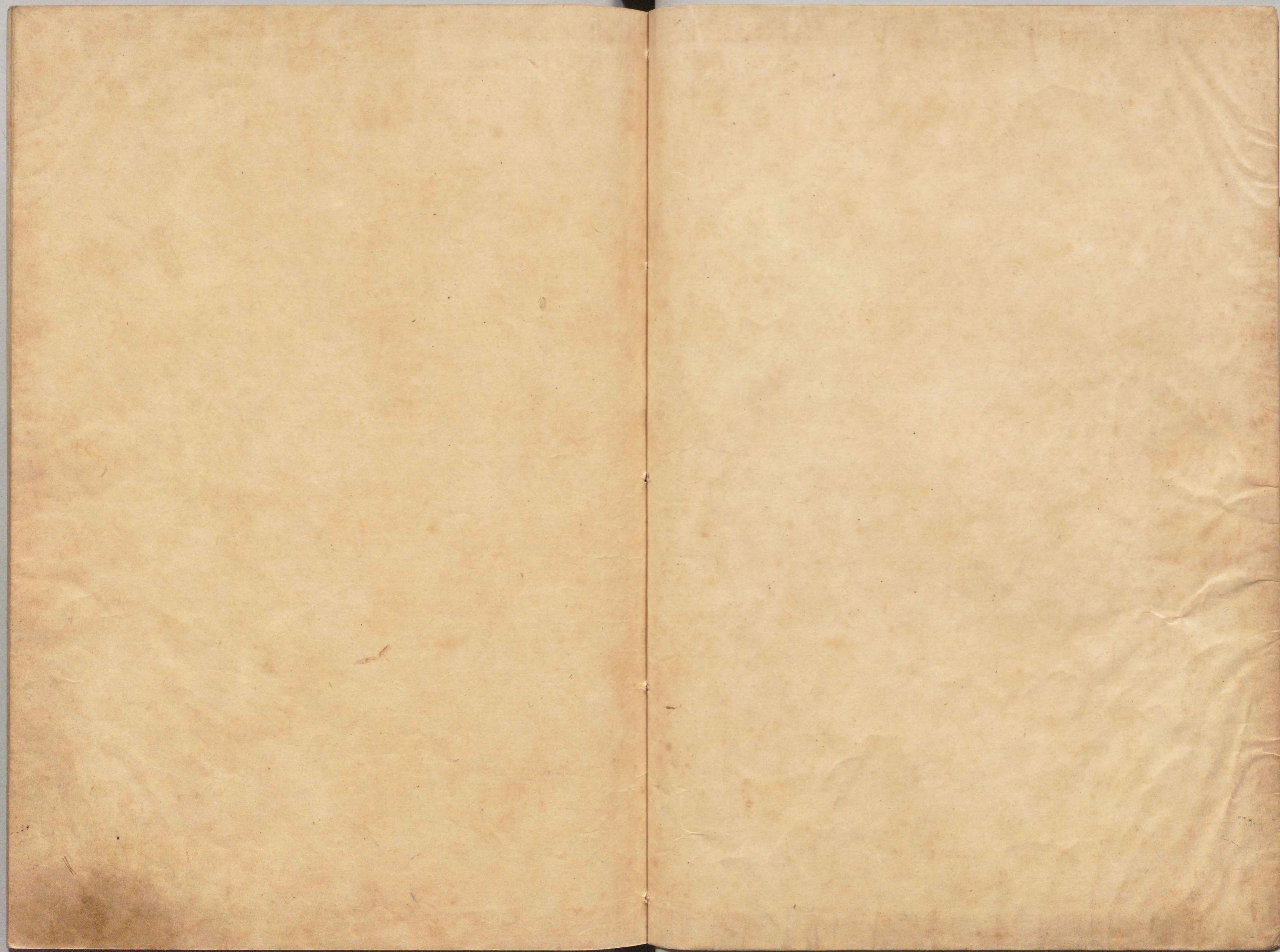
清和源
頼光流

九冊之内

26

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186 (26)		
函號	76	1	





大河内

寛永諸家系圖傳

清和源氏

頼光流

大河内

丁四 乾

浅草文庫

右清和源氏正綱伊豆守信綱八松平の
号稱号とゆといへども金吾清久綱又
号号と稱号とす
号号と稱号とす
号号と稱号とす

● 頼光

撰津守

頼國

美濃守

頼綱

参河守

仲政

兵庫歌

● 頼政

兵庫歌

従三位

歌人

武藏一長寸

近清院二條院此御宇二つ比佐鳥射

てうれ名とあつ守

治承四年宇治合戦の時平等院小く

自害案七十五

頼行

歌人

兼綱 かねつな

源太史判官 弓馬此達者

父と同時におりて敵と争つた

討死

顯綱 けんつな

大河内源太 兼綱が三男

兼綱討死の時顯綱二歳母を乞ひて

政顯 せいけん

太郎 木五郎

寺津郷 江原郷に依りて

弘安年中卒と、年八十六法名圓通

行重ユキシゲ

木之三郎

法名行空ユキウ

宗綱ムネツナ

弥三郎

曆應年中卒リョウオウ

法名觀威ケンイ

貞綱マコツナ

孫太郎

應永四年正月七日卒オウエイ 歳八十九

法名良珍リョウチン 道号寶岩ホウガン

光乃ミツノ

大膳亮 但馬守オホノリ

母八松田三郎左衛門尉康继ヤシキ びとめ

應永二十五年卒オウエイ 歳六十六 法名

貞昌マコノブ 道号桂岩ケイガン

國綱くにつな

五郎三郎 但馬守

母八おや大沼田掃部助重長しげなががむすめ

光綱みつつな

五郎三郎 從五位上

文明元年七月十八日三列吉良庄東
條合戰此時山王山少く討死 歳四十九

道号三山

真綱まつな

五郎三郎 法名是信

信政のぶまさ

五郎三郎 大藏少輔

法名真育 道号彭泉

信貞のぶさだ

孫太郎

法名宗空しゅうくう

道号心月しんげつ

秀綱ひでつな

金兵衛 母ハ小見こみ頼祿たのりくがむすめ

東照大権現とうしょうだいこんげんと稱なづ奉たてまつる遠別とんべつ禊原せいはら地

とてありしそ 其後そのち刺髪さしかみして休心しゅうしんと号す

元和四年九月十三日卒と云 年七十三

久綱ひさつな

大河内金吾清尉 生國三列

母ハ鳥居とりい掃部さうぶ助すけがむすめ

長十五年ちやうじゅうごねんあり

大権現

名徳院殿なとくゐんより清きよののちなるのち後

將軍家しやうぐんより清きよののちなるのち

正綱

松平右衛門左衛門

生必を列

母ハ久綱一子

初此名ハ正久後一正綱と改む

幼女此時

大権現此後一依之松平甚右衛門正次

養子と名づく松平此称号一依之松平

和泉与信光自月堂との才俊中守久

親子と名づく乃後胤長沃此流なり

正綱十七歳より

大権現一依之を之と名づく

常一子左衛門一子

長五年開原陣此後を勤む

同八年三月廿又日従五位下を叙す

右衛門佐一任せしめて

大権現將軍宣下御系 同此後を

列す

同十五年十月十四日幕地三千石と

くふくふ是駿府火事此時正綱が
人と下知事奉 沖意よなるふ火なり
大坂支度此沖陣に供奉寸沖陣の
後

大権現此依之依之正綱板倉内膳正重
昌秋元但馬守泰朝と同づく政事よ
あがら奉書此判然とくふ

元和二年

大権現沖不例此時正綱本多上野分正純

板倉内膳正重昌秋元但馬守泰朝と同
く沖意言此事とらげしる

四月十七日

大権現薨御遺言よ依之駿府久能山
よおさめなる正綱なまびよ進位敷事こ
まよきしふ他人みづらよ奉り舎しる
奉あつし守翌年 御廟と下野五
日光山よりつらなる時正綱供をこく

寛永二年七月廿五日

台徳院殿二万二千石餘此 御朱印

とたすふ

台徳院殿

將軍家御二代此間日光山御神宮此
造営なむびよ御系礼法舎等此事正
細等毎度其事よあがりらる此御還
乃ちひび敷と日光山を急此御次の左
右三里餘此有よへく敷年此中よ
もふらぶ着りありて外はく取ら

おろくをさふ

同十八年日光山御石廟建立此と記
正細をいし御造畢此又一文字此
腰物とすまふ

系

金七郎

系

長無清

女子

秋元但馬守が妻

利綱

左門

作渡守

生玉茂列

幼少なり

名徳院殿

將軍家と好しなり

寛永十三年十二月晦日從五位下叙

隆綱

主膳

生玉同好

幼少なり

名徳院殿

將軍家と好しなり

正光

造酒

早世

女子

土屋民部ぶらが妻

女子

榊原越中守の妻

信綱

松平伊豆守 生國茂茂

右衛門大丈正綱が養子となりて松平氏と
稱す

享長九年七月十七日

將軍家御誕生同月廿五日信綱初め之川

之なり時より九葉

元和九年

將軍家御入洛けしに征夷大將軍に任じ

たすし時信綱従五位下に叙じ

寛永十年五月五日武列忍城とすまふ

此時終り依りて土井大炊頭利信酒井

瀨波守忠勝と同く在書此判致とくハ

政督とあがりまき

同十一年

將軍家沖入洛の時信細從四位下^至叙^至

同十三年此冬朝辭^至此信使來朝^至此時^至

至^至此禮曹書簡^至なほ^至び^至土產^至と^至守^至信細

も又^至返^至答^至と^至送^至り^至音^至物^至と^至守^至

同十四年此冬肥前國高來郡肥後^至至^至天

草郡^至小^至吉^至利^至支^至丹^至邪^至法^至と^至企^至一^至揆^至と^至お

う^至て^至有^至馬^至の^至四^至城^至よ^至こ^至こ^至り^至の時^至信細^至戸^至田^至

左^至門^至氏^至鉄^至と^至同^至と^至く^至上^至使^至と^至守^至鴨^至原^至

よ^至下^至向^至と^至る^至國^至此^至諸^至軍^至と^至る^至り^至舎^至と^至て

翌^至年^至二^至月^至一^至揆^至と^至こ^至こ^至く^至伏^至誅^至と^至政^至法^至と^至沙

法^至と^至江^至戸^至と^至り^至ゆ^至り

同十五年の冬大炊^至頭^至護^至波^至守^至職^至後^至と^至忠^至許^至

せ^至ら^至る^至よ^至り^至信^至細^至何^至部^至と^至後^至守^至忠^至秋^至同^至對^至る

守^至重^至次^至と^至同^至と^至く^至奉^至書^至此^至判^至教^至と^至く^至之^至國^至

政^至と^至守^至行^至と^至く

同十六年正月五日恐^至此^至城^至と^至わ^至る^至武^至列

河^至越^至此^至城^至と^至願^至と^至る^至地^至と^至く^至久^至た^至ま^至す

同十九年八月三日

竹千代君御誕生日と賀しなり御膳と

將軍家と就く時と御祝儀とて一文字の

御膳物なまびと御茶入御肴御衝と御

飲と

同二十年此秋朝鮮此信使來朝の時

此礼曹参判書等なまびと去書とて

信網 仰り候へ返簡なまびと音物を

とくり

同年九月信網酒井環波守と同どく

上使より上治寸 御即位の儀あり候と

仰り候へなむ

系

内苑助 早世

重綱

大河内又兵衛

寛永三年

将軍家と母一なり

同十年 御妻と勤む

女子

天野あまのをお守が妻め

女子

不多えげ丹下が妻

輝てる網ふ

甲斐守 生玉茂列

母は丹上に主計頭まじやう正就がむすめ

幼女ようめなり

将軍家と母一なり

寛永十二年 従五位下に叙じゆ

同十四年 冬 父信綱 上使かみとして肥

前まへ國の碓す原はらに赴まゐり一撥ひとに邪徒よことたい

ぐる時輝綱曰く是より去るがひげめく
戰場に赴き翌年五月江戸の陣を

吉綱

三右衛門 生國曰あ

幼女あり

將軍家とあり

定綱

内記 生玉曰あ

寛永十八年八月三日

竹千代君御誕生同月九日あり是小治の

なり

治綱

采女 生玉曰あ

定綱と同時あり

竹千代君とあり

女子

酒井梅津忠當の妻

女子

土升遠江守利隆とらが妻め

女子

秋元隼人あきもと忠朝とむが妻め

大河内家いほのし紋ふ浮せん縁きり綾

右濤門みぎ安正やすし細伊豆守ほそいづのみ信細のぶ八三やち本もと扇あふの丸まると

紋もんと守もり

大河内

光武代

● 頼政

兵庫頭

従三位

益 綱

源太史判官

従五位下

頭かしら網あみ

大河内源太おほふち

生玉三河

貞まこと頭あみ

右衛門尉

氏うぢ網あみ

右衛門尉

氏うぢ長なが

太郎

重おも氏うぢ

肥ひ前まへ守もり

貞まこと重おも

修理進しゆりしん

政まさ貞まこと

源みなもと重おも

政まさ治ち

源みなもと重おも

政まさ時とき

右馬みぎうま助すけ

正ただ信しん

源みなもと重おも

政まさ利り

源みなもと重おも

政倫

乃監

政高

善右衛門尉

基高

善右衛門尉

善良此家ノ法久ク教養此戦功あり

享長十七年十二月五日死寸九十八歳

法名古頸

正綱

善右衛門尉

善良此家ノ法久ク教養此戦功あり

永祿年中

大指現(石出)家

元龜元年六月廿八日江列姉川合戦

乃時軍功あり

同三年遠列見付此原少ク戦功あり

げまふ

天正九年三月廿五日を別言天神少く

高名とあつりす

之後紀伊大納言頼宣卿に侍り

寛永四年二月廿二日死す八十四歳

法名道樹

正澄

善左衛門尉

天正十二年十五歳一して

大権現へ石出さふりせり

名徳院殿より流しなりて真田御陣乃供

奉と勤む

寛文十九年元和元年大坂の役乃御

陣と勤む

寛永二年正月七日死す五十六歳法

名道受

政憲

善后清門尉

生正武苑

長十八年十一月十一歳少く

名徳院殿と稱しなりと云後

將軍家より流しなり

正勝

平十郎

善音清尉

大権現

名徳院殿より流しなり

名徳院殿の位小依く御目付に及ぶと勤心

と云後

將軍家より仕へたりて御使者とあり又肥

列長瑞此奉所となす

寛永十七年六月廿四日死と云六十二歳

法名日淨

忠雄ちゆうゆう

大八郎 若吾衛尉

實ハ大久保 彦左衛門尉 忠教ちゆうけうが子こナリ

寛永十五年正月十五日

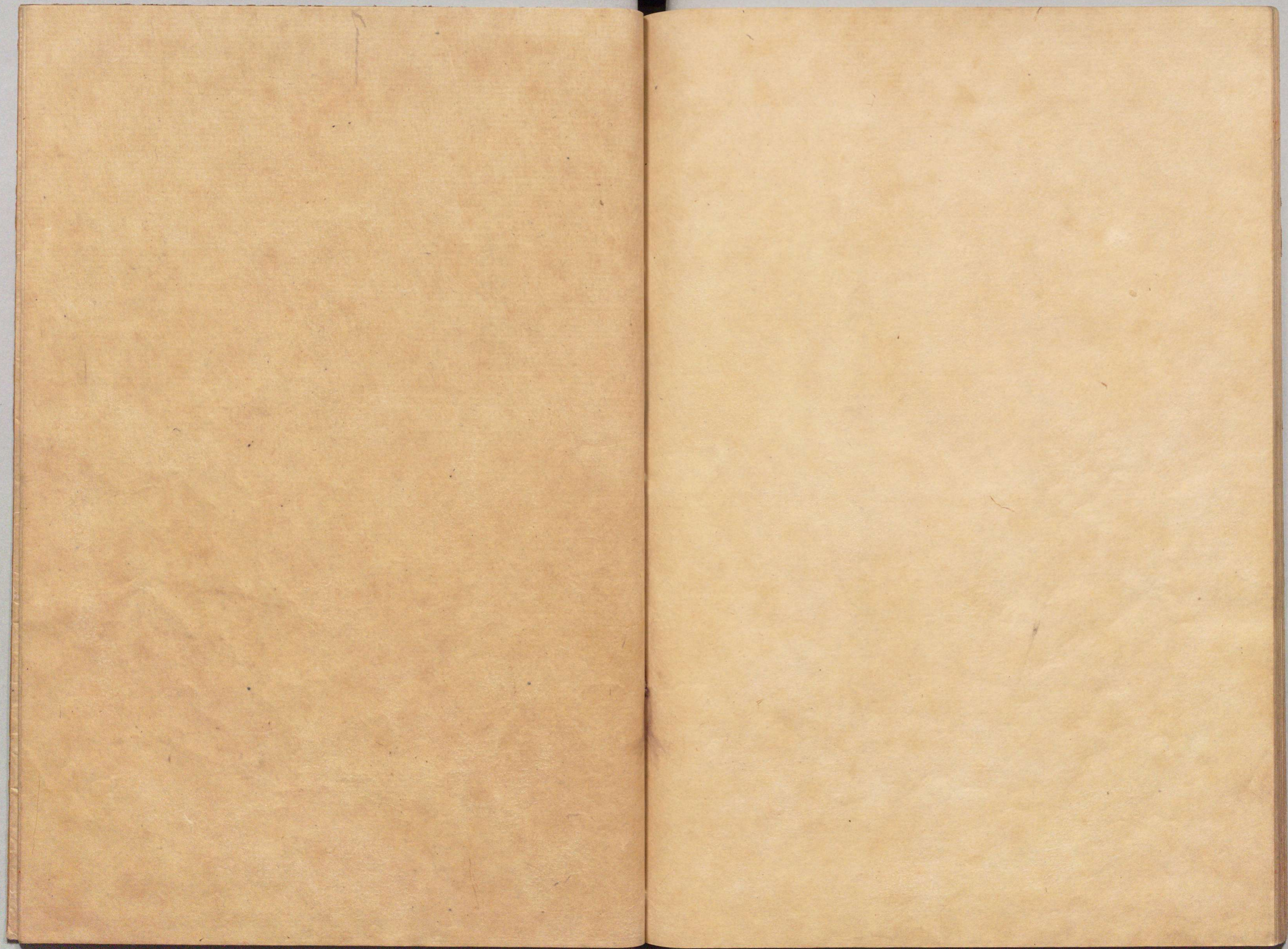
乃軍家とねししきまのふ

同十六年五月朔日 食禄しきりくとししき

同十七年 釣命つひのみことと保たもく父ちちが家督けとくと

はぐ

家いへ級のきん三連さんづき此こゝ蝶てつの月つき十六じゅうろく葉は乃の菊きく



大河内

忠正

劫奪中左衛門

生國駿河

今川義元いまがわ ぎげん元もとは流ながるるにあつつては武田信玄むけのしんげん頼より

一いっ属ぞく一いっ々々救度きうど此こゝ軍ぐん功こうあり

高たか天神てんじん落おち城じやう此こゝ時とき石いし出できまり

大権現おほごんげんととおお一いっ々々なり

正勝 まさかつ

又次郎 生玉同前

大権現 だいけんげん 一仕へ在り

長文十年病死

忠次 ただつぐ

兵右衛門 生玉武藏 むさし

大権現 だいけんげん 一仕へ在り

長文十八年

名徳院殿へ召出され在り

將軍家へ一仕へ在り

家紋 いゝのしき

